

昭和三十二年十一月 〇〇講演

## 「米国およびカナダの学生生活散見」

山岡喜久男先生

昨年、米国の招請で、米国およびカナダの諸大学を視察する機会を与えられたが、その際大学のキャンパス（構内）内で受けた学生生活についての印象の若干を塾生諸君にお伝えしたいとおもう。これは、価値判断や加工を加えないただの印象であつて、参考になるかならぬか取捨選択は全く塾生諸君の御自由である。

第一に、師弟関係における自由と秩序について、われわれの場合と違っている雰囲気注目したい。はじめに、自由なインフォーマルな関係について。わが国やドイツでは大学の教師というものの風貌、動作がややいかめしい様相をもっている伝統があるが——これは両国の封建遺制と関係があるかもしれない——、アメリカやカナダではずっとくだけた親しみ易い雰囲気であることはたしかである。

まず、驚いたことには、学生が教授を略称（マクドナルドであつたら、マックというように）で呼びすてにして——ハウ・ドウ・ユー・ドウ・マック——ミスターとかプロフェサーと敬称をつけない場合がおおく見られたことで

あつた。たとえば、わたくしであつたら「ヤー」と呼ばれるわけである。日本のしきたりからするとはなはだ失礼なことになるかもしれないところが、むこうの教授連中はその方が嬉しいらしいのでおかしなことであるとおもつてそのわけを探ってみると、そういう風呼びすてにされるのは、親しまれ、人気のある証拠だと見ているらしいのである。だからといって学生が教授を軽視しているかというと、決してそうでなく、実力のある先生は内心深く尊敬しているのであるが、儀礼として重々しくしないということであろう。教室でチューインガムをかみながら講義をきいても教師は気にしない。一方、教師が自分の科目を選択した学生の名前をおぼえることはまことに早いものであつて、ある教室で学期初めに八十名以上の学生をABC順に着席させ、全部おぼえておいた名前をつぎ

つぎに当ててしまった教授があつたことをおもいだす。学生を知ろうとする意欲、つまり学園におけるヒューマン・リレイションズといふべきものの発達には見るべきものがあつて、小

学校長でも数百名の児童名を全部覚えていて、廊下で会つたら、すぐ名前を呼んで親しみをあらわすようである（わたくし自身も小学校で見聞した）。

つぎに、師弟関係の秩序について。われわれの場合は、学校でも家庭でもべつ幕なしに学生と会っているが、アメリカでは大学内の研究室（これは同時にオフィスであるが）で週二三回位の決つた時間以外には会わない。まして、家庭におしかけるということはない。まことにビジネス・ライクである。われわれは「おい、まんじゅうがあるからあがれ」などと家庭へも簡単にひっぱり込むが、そういうことはしない。もし、家庭へ招待する場合は、もはや、教授と学生という関係でなく、完全に対等な人格として正式に食事に招待されるのである。これは随分名譽なことに感じているようであつた。

このように、教師の家庭はわが国よりやや閉鎖的であるともいえよう。それはアメリカのミシズ（夫人）の位置とも関係がありそうである。われわれと違って、ミシズの同意なくして、人

を招くということは絶対にならないということも想起すべきである。

つぎに勉学についていうならば、日本の大学より、はるかにきびしく、ドイツから来た学生など「つめこみ主義」だといっていやがっていた。大量の読書をさせられ、つぎつぎにレポートを書くことを命ぜられ、またそうしなければ単位がとれない。経済学を例にとれば、完全な一時間授業で、週三回か四回あり、二週間目には試験(クイズという)がある。日本ではノートだけで、優がとれるが、教師のいったとおり書いただけでは大体「丙」、いくつかの本を読んで学説を羅列した程度では「乙」、さらにこれらを多少ともコンデンスして自分のものとして回答できれば「甲」といったところが標準のようである。

はじめのセメスターの始まる九月上旬に学生達は、寮にみなあらわれ、スタンドの具合を直したり、机の位置を直したり、どうしたらすぐくエフィシエントのスタートができるかとはりきつている様子は、なにか競馬の準備でもしているようなスポーツ的のものを感ずると同時に、その勉学への気魄は見るべきものがあるとおもった。

つぎに、アルバイトについて。アメリカでは大学に入った後は、父親の世話にならない(女子は別)というのが原則のようである。がんば

って大学のスカラシップをもらい、食費(ほぼ、年間五百ドル前後)を三カ月の夏休みに稼ぎ、とにかくインデペンデントに身を処してゆく。バイトで年間の食費が稼げるのはうらやましい次第であるが、それも必ずしも、日本的にみて品のいい仕事をやっているという訳でもなく、パートタイムで食堂で働いているものも多くみかけた。彼等は働くということには誇りをもっていて、同級生の前で働くということも少しもおおずおおずしていなかったのはいいことだとおもわれた。市長や大臣でも、子供に新聞配達をさせることなど普通のようにであるが、職業に貴賤のないことを教え、インデペンデントの精神を養うという意味もあるだろう。また、子供達もいい稼ぎになるから懸命にやる——時にはやりすぎる——という一面もある。

つぎに、男女関係について。高校や大学のうちが結婚の相手をさがす重要な場所であるというの事実とおもう。ただ、第三者が介在してすすめられる仲人結婚が絶無である国では、相手をさがすことが必死の課題であり、やむを得ない点もあるようにおもわれる。その点は、日本のように結婚問題は、いざとなればみんなで心配して、ほっておかないところでは、学生時代は一般になんとなくおっとり落ち着いていて、アメリカに比べてこれもなかなかいいような気がする。

アメリカ高校生のゴーイング・ステューデイの問題は、アメリカの両親達にもたしかに響感の種であり、これに伴う早婚の可否も問題である。エールでもグラデュエイト・コースの学生の三分の一位は結婚してミシズが全部働いている。一般にデイトした女性に対する男子の惜しみなくサーブする様子は、まことに「涙ぐましい」ものがあるらしく、おそらく騎士道から発達した一種の型とも解釈されようか。「残菊物語」などに代表されるように、日本女性が男性の出世のためにはワイフの席をゆずり乍ら、死の床においてまでも、すきな男性にサーブしているというような型とまさに逆であるといつてよいだろう。

ただ、結婚といつても、きわめて周到な計画を先の先までしているものがおおいようで、映画でみられるような出たとき勝負のものではないのである。日本では、もう結婚したらどうかなどというと、とても食っていけないからまだだと答える。そうすると、一人では食えなくても二人なら食えるものなどといつてすすめる。しかし、こういう魔術的論理は、そのままではアメリカ人に納得してもらえぬだろう。ビジネス・ライクは結婚の計画にもあらわれる。なお、レディ・ファーストは徹底的のものであることもよくよく知って覚悟して置かなければ国際社会に出ていって大変なことになる

から、塾生諸君もその点は銘記せられたい。日本のように、暗に一夫多妻的な雰囲気は是認せられ、女は泣き寝入るものときまっている社会とは大変な違いであるから、その点、念のためにあえて申し上げる次第である。

おわりに大学と社会との関係について。わたしがアメリカからカナダにいったころ、人工衛星スプートニク一、二号が打ちあげられて大さわぎであった。ところが、その反応は、あとになつてみると、案外、日本の方が大きい点もあつたのではなかったかということを考えてみたい。日本政府は、あの頃から理工科拡充という線を変つよく押しだしてきており、文科の方は少し影がうすくなつてくるような印象を一般の人ももっているのではないかとおもう。しかし、アメリカでは大学の神学部や哲学部や文学部を縮小しようなどということは絶対に考えていない。わたくしは、こうした尭(ぼう)大な文科的・人文的人間を生みだす教育体制は、依然として人類史に意味をもつものだとおもっている。なぜなれば、人類の永遠の平和は、人間とその運命というような根本的な問題に思いをいたす人間、すなわち広い意味の文科的人間の数がおおいことが前提条件になるとおもわれるからである。

(本塾評議員)

※当DVD収録のご講演録には、現在では不適切と思われる表現が用いられている場合がございますが、講演時の時代背景等を尊重し、当時のままといたしました。